

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：33912

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00671

研究課題名（和文）証拠性（evidentiality）から見る日英語比較統語論

研究課題名（英文）Comparative syntax of Japanese and English from the perspective of evidentiality

研究代表者

赤楚 治之（AKASO, Naoyuki）

名古屋学院大学・外国語学部・教授

研究者番号：40212401

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：世界の言語には、情報の出処を示す表現（証拠性マーカー）を豊かに持つ言語とそうでない言語がある。日本語は英語とともに、後者のグループとみなされている。今回の研究では、日本語において、一見証拠性マーカーには見えない要素が文に付加されることで、文の正否に影響があることを示した。たとえば、物事が進行中であることを表すアスペクト表現の「ている」は、話者が眼前で起きている事実を伝えることをも表現している一種の証拠性マーカーとなりえるが、それにより、文や句の成立に影響を及ぼすことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義としては、証拠性が統語構造に影響する日本語の現象の観察、生成文法と認知・構文文法との共闘の可能性と重要性の提案、の2点が挙げられる。日本語における、事態把握の伝え方が統語構造に影響を与えることが明らかになった。社会的意義としては、文脈依存度の低い英語と高い日本語の違いが証拠性という点からも言えることが明らかになったことである。証拠性を示す表現形態は言語によって異なるが、日本語は証拠性の形態的表現に関しては決して豊かな言語ではなく、英語と同様に直接的な表現方法で示すのがデフォルトであるが、表面的には証拠性とは無関係に見える文法操作がそのような表現を代替していることがわかってきた。

研究成果の概要（英文）：Languages can be divided into two groups in terms of evidentiality: one is rich with evidential markers which provide the source of information, and the other is not. Both Japanese and English are considered to be in the latter group. This research showed that elements that do not appear to be evidential markers in Japanese can have influence on grammaticality. For example, "-teiru," which expresses something in progress, can be a kind of evidential marker which shows the fact that the speaker is conveying the information that something is happening right in front of him/her. We showed it may affect grammaticality judgement of sentences.

研究分野：理論言語学

キーワード：生成文法 証拠性マーカー アスペクト表現 伝聞の補文標識

1. 研究開始当初の背景

20世紀初めに F. ボアスから始まった「証拠性 (evidentiality)」の研究は、近年、注目が集まり、これを文法範疇に持つ言語を中心に、数多くの言語において興味深い事実が発掘されてきた (Aikhenvald (ed) *The Oxford Handbook of Evidentiality* (2018) など)。証拠性に乏しい英語や欧州言語では、副詞句や伝聞の動詞などにより語彙的に表現される。日本語では、語彙的表現に加え、モダリティやアスペクトなどによっても表現される。証拠性は、命題内容自体に影響を及ぼすものでないという認識があったため、統語論の自律性を作業仮説に掲げた生成文法では、語用論の問題とされ、証拠性が論じられる余地がない状況が久しく続いた。

1990年代後半からヨーロッパで始まったカートグラフィー研究は、談話と文 (= 命題) を結び付け、言語の情報構造と統語構造との関係について明らかにしてきた。この研究は、それまでの生成文法が切り離してきた談話・文脈といった面を取り入れたもので、その影響下で、証拠性を統語分析に取り入れる動きが2000年代に始まった。副詞の分析から Cinque, G. (1999) が、「視点」が絡む日本語の分析から Tenny, C. (2006) が「証拠句 (Evidentiality Phrase)」(或いは Sentience Phrase) を提案している。特に、日本語では、受益表現、ダイクシス、ロゴフォリック代名詞など、解釈に関わる現象に関して優れた研究も出てきた (Nishigauchi, T. (2014))。しかしながら、証拠性は依然、認識的モダリティとの関連からの意味論的分析が主流であり、生成統語論における証拠性への言及は、ほとんどが副詞の生起位置や代名詞の解釈などに限定されており、両者の関係をさらに広く調べる必要がある。

2. 研究の目的

本研究の主目的は、日英語における証拠性と統語構造の関係を明らかにするものである。誰がその情報 (= 命題) を持っているのか (出处) を示す証拠性を独立した文法範疇としない言語 (英語と日本語など) では、語彙的表現やモダリティなどによって証拠性が示される。これまでの研究では、証拠性が統語構造に反映されるかについて論じられることはなかった。談話と統語構造の関係をメカニズム的に明らかにしてきたカートグラフィー研究の成果を利用して、証拠性と統語構造の繋がりを明らかにする。

3. 研究の方法

日英語において「証拠性」が統語的に現われるのか、また現れるならば、構造上、どのように具現化されるのかについて比較統語論の観点から解明することにある。まず、証拠性が関与する日英語の構文を検討する。英語においては、焦点化や右方移動などの語順変化と証拠性と関係を調査する。日本語においても、同様に調査を行うが、終助詞や数量詞遊離現象との絡みで不可視的な語順変化 (主語の位置) にも注目して調査する。その上で、談話領域にある主要部、或は談話機能が証拠性とどう結びつくかどうかを調べる。最後に証拠性と事態把握の関係を考察し、事態把握と統語構造との関係を明らかにしたい。

4. 研究成果

世界の言語には、情報の出处を示す文の要素 (証拠性マーカー) を豊かに持つ言語とそうでない言語がある。日本語は英語もともに、後者のグループとみなされている。今回の研究では、日本語において、一見証拠性マーカーには見えない要素が文に付加されることで、文の正否に影響があることを示した。たとえば、物事が進行中であることを表すアスペクト表現の「ている」は、話者が眼前で起きている事実を伝えることをも表現している一種の証拠性マーカーとなりえるが、それにより、文や句の成立に影響を及ぼすことを明らかにした。

学術的意義として 証拠性が統語構造に影響する日本語の現象の観察、生成文法と認知・構文文法との共闘の可能性と重要性の提案の2点が挙げられる。日本語において事態把握の伝え方が統語構造に影響を与えることを明らかにした。社会的意義として、文脈依存度の低い英語と高い日本語が、証拠性という点からもそう言える可能性を指摘できたことである。証拠性を示す表現形態は言語によって異なるが、日本語は一般的には証拠性の形態的表現に関しては決して豊かな言語ではなく、英語と同様に直接的な表現方法で示すのがデフォルトであるが、一見、証拠

性とは無関係に見える文法操作がそのような表現を代替していることがわかってきた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 赤楚治之	4. 巻 34-2
2. 論文標題 構文文法と生成文法－that-trace効果を巡って－	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 名古屋学院大学論集（言語・文化篇）	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15012/00001448	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 赤楚治之	4. 巻 第33巻 第2号
2. 論文標題 「が・の」交替の第3アプローチ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 名古屋学院大学論集（言語・文化篇）	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 赤楚治之	4. 巻 第32巻 第2号
2. 論文標題 日本語における「が・の」交替とhigh adverbs	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 名古屋学院大学論集（言語・文化篇）	6. 最初と最後の頁 23-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15012/00001325	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Akaso, Naoyuki	4. 巻 第31巻2号
2. 論文標題 Acceptability judgments and subject position in Japanese Q-float	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 名古屋学院大学論集（言語・文化篇）	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Akaso, Naoyuki	4. 巻 Not Yet
2. 論文標題 On a new type of D-licensing approach to Nominative/Genitive Conversion in Japanese	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Proceedings of the 17th Workshop on Altaic Formal Linguistics (MIT Working Papers in Linguistics)	6. 最初と最後の頁 191-198
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 赤楚治之
2. 発表標題 生成文法の持続可能性について
3. 学会等名 同志社ことばの会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 赤楚治之
2. 発表標題 構文文法と生成文法：that-痕跡現象を巡って
3. 学会等名 同志社ことばの会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Akaso, Naoyuki
2. 発表標題 A Labeling Approach to Japanese Nominative/Genitive Conversion
3. 学会等名 Seoul National University International Conference on Linguistics 2020: Theme Session: Syntax-Semantics (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 赤楚治之
2. 発表標題 生成文法における統語テストの精密化：非対格性と主語位置をめぐる
3. 学会等名 同志社ことばの会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Akaso, Naoyuki
2. 発表標題 On Chomsky's Interpretation on Jespersen
3. 学会等名 Henry Sweet Society Colloquium (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Akaso, Naoyuki
2. 発表標題 On a new type of D-licensed approach to Nominative/Genitive Conversion in Japanese
3. 学会等名 Workshop on Altaic Formal Linguistics 17 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 赤楚治之
2. 発表標題 大阪方言と「が・の」交替
3. 学会等名 同志社ことばの会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------